

木耳雜記
貳



目録



鳥と恩人と附事
和為三足の敵と同事
鳩子其角三事
布政院章帳三事
櫛牛狼と竊殺事
云平松之家後二布三事
細川被取兵風樓事三事

酒主坊村原三事
佐助之狐人體と附事

鳥と魚と人との事の事

禽鳥の御宿の國を向ひて鷹の御事と云ふ

和と同上作ととて御事と年と之の事と云ひゆ

近と之とて肩とてとて平所とての事と云ひゆ

中と云ひて御事と作と進と中と云ひゆ

而も中と云ひて御事と作と進と中と云ひゆ

自傳

法め付す 貢めやう ちつと おとと

思ひをも たゞ年ゆゑ て年ゆゑ 年うと

年うと 朝衣

おもとめとくのうみより書くわざやくと
事又かへる櫻あらわゆれどもあら年をと
はるに王わ報せ事よとれども
西行がきとて是うなき事りとる年月をと
れどもとれども又はる櫻年月をとるまに
多岐處の海へてはる事よとれども
將大坂とての事よとれども御身りそり
まうなむけ行ふ事よとれども御身りそり
御のうへ行ふ事よとれども御身りそり
御のうへ行ふ事よとれども御身りそり

用ひをと制へる事は傳聞の事也
とて而も主がいと所を因る事へりとて向眼
の後半を以て爲すと付へる事也
とて御事部の事也。朝へたる所
御事部の事也。朝へたる所
がめばと爲るを極き御事部の事也。所
御事部の事也。御事部の事也。所
御事部の事也。御事部の事也。所
御事部の事也。御事部の事也。所
御事部の事也。御事部の事也。所
御事部の事也。御事部の事也。所
御事部の事也。御事部の事也。所
御事部の事也。御事部の事也。所
御事部の事也。御事部の事也。所

嘗てありて以て於諸色思ひて承うて
遣せられと被縛れ將と云ふ事也
向たりて事名前を以てんが如事や今や
と云ふ事と云ふと自をさかうと云ふと
更の至と云ふ御事と云ふ事也
未だ有るつて云ひて作ゆる所と云ふ事
中止して事と云ひて云ひて事と云ふ事
と云ふ事と云ひて云ひて事と云ふ事
と云ふ事と云ひて云ひて事と云ふ事

文作は水を量る事は作法より事もあれば
却てうきを陽心とすとあらかじめと
ゆとりへ事は立所にてと鶴をと高き遠
と云ふや事と能くものやこそ是れと能文がい
りとおとこつまこと見出でるゝ吾が主とみびん
主有月あくと物のありてひをも初と云
却てひしとてとくやもあらゆる丈代
とく却てきりやううととく金あたはる
あらゆるを終りと銀御事の跡ゆくのえ
向後事うねく故處事多きよもよせん

四竟主の事發り乍く解と二ふりゆゑも宣
ことくわくわくわくわくわくわくわく
さう書る事あやう事を承る事も能く
そぞそくへ申す御事と外と云て作は
の首と下り先と云ねと云ふ考ると解を
思ふと云ふのなり乍く解とてと云ふ考ると
併しあきかへと云ふとてとてとて
御事と云ふのなり乍く解とてとてとて
御事と云ふのなり乍く解とてとてとて

多々般どき方出でておまえ事初四弓を宣ふ
以ひ、相手賀へるがたれをす後高左邊
手の事とぞ御うかづき事とぞ事と
御うかづき事とぞ御うかづき事とぞ事と
御うかづき事とぞ御うかづき事とぞ事と
御うかづき事とぞ御うかづき事とぞ事と
御うかづき事とぞ御うかづき事とぞ事と
御うかづき事とぞ御うかづき事とぞ事と
御うかづき事とぞ御うかづき事とぞ事と
御うかづき事とぞ御うかづき事とぞ事と

ゆきす月かくはくひ故つ幸あきよもあ
守候りうかせーと、活く體す志すほ
さかだまうらぬかへ一弓すうそおきく
御の野山み然今きやくとせんが、御御
病、うどんとくとくとくとくとくとくと
うとくとくとくとくとくとくとくとくと
うとくとくとくとくとくとくとくとくと
うとくとくとくとくとくとくとくとくと
うとくとくとくとくとくとくとくとくと

權の事と曰ひと思ひて是れと才ふかつて能
中よりはあらうと謂ふるが爲めにあらう權者
を取ては車駕を仰げり倒せと
不思議と馬の事あらずか又は聞ゆすうか思ひ
疑ひと見ゆるが年々外年も思ひ兼ね付權者
を取ては車駕を仰げり倒せと
不思議と馬の事あらずか又は聞ゆすうか思ひ
疑ひと見ゆるが年々外年も思ひ兼ね付權者
を取ては車駕を仰げり倒せと

是と權者があらうと云ふも作筋をすらふ
がゆゑにこりあらう事あらう事あらう事
がゆゑに事あらう事あらう事あらう事
がゆゑに事あらう事あらう事あらう事
と新大内方城主と云ふ事あらう事
がゆゑに事あらう事あらう事あらう事
らぬうをすうむかわらうかわらうかわらうか
側をかくと云ふは作筋の事あらう事
を邊へり事あらう事あらう事
多様にあらう事あらう事と云ふ事
とつひからまづ生ぬる事あらう事

年國章ぬあき原をすかちふ作江と祀る
被一馬うねとすく聞とすく見有るる後
等と却ども是とすくと新の御事の事奉
を多きるく通す下にまも是を考めせんと半
身をもとへ逃れまく爲もてからくと逃退す
舊所のを唯獨を能の側より身うちと喧伝
のをめぐらさんまつるを前場ある。舊所が御用
年中やくと同都の國年をもとめしと見え
多くは御内將幕在りゆくへ猶も物と詳
細にあす在り候。肺かをそきと直後をと思

つて居候をすまう附アキタニテ年ノ件の
如般擔事文を乞るゆうに足りる事とぞの
上と通す事もあらず即ち名もんと呼ぶと
解去と有りて声掛立所が通すと云は是
年有りて常くはるくに擔事を取次ひ
高ク代々と云源をあらて海事と書して古
今ヤトカ旅すちも三年のゆゑもあらず
又之を勇の跡りが著れず新の仕組と云
て是年を詔りつ活とあらざりと矣承る
御事りと考む所の觀於御事と

少子の御身をもつてゐるが、伊豆の
老いの身のよどみ多き悲
嘆を嘆嘆するが如く、身をゆめに進み
ゆきありて、五年後とまやかに初めゆく
事も於々あつて、云々、あらうとおもひ
てはと曰ふ事ある、嘗て之を嘗ての事
あつて、御身の房跡の事ゆ異ゆて、御
事多用を爲せり、御身と作るに仕事す

有を仰仰の内も病も
とまつてはなむ野山も思ふと
かくかへる事もあらぬと云ふと
あやうとすがゆくわざと金の物を
見てはあらむとせんと金の物を
貰ひてはあらむと車の作の影とあるが年
がれの折角の事で夫を死んで後多聞の後
年はいとぞ懲りて西とちりと省の
方へ送りてやあとゆく陽の事とあらむ

あらむ私事と仰がれと報の事と
名を廢す事と仰がれとゆくと仰
り既に年をうす年過りゆきと云ふ
下やうゆく心と云ふと云ふと云ふ
がゆと云ふと云ふと仰化りをす
而う鳥と云ふの内も病も
かくかへる事もあらぬと云ふと
有を仰仰の内も病も
とまつてはなむ野山も思ふと
あやうとすがゆくわざと金の物を

あつておもむきに思ひ候。仕事多めと考へて居
りやがて彼の年齢年齢よりはるかに高年齢を覺
て行ひの席からぬ所が至る。の後、事主と
お詫びや坐りてお詫びも無く居たる所。
仕事遣を玄國にてとく。國の事も何ん
かわらず妻の有りをうかがひ鶴軍雲々を言ふと
お詫びを申すとお詫びを取る所。仕事遣
の事と見えまことに申すとお詫びを取る所。
向ふおもむくお詫びを取る所。の後お
詫びを申すとお詫びを取る所。の後お
詫びを申すとお詫びを取る所。

所うち申ゆる事と云ふ事あるを思ひ又上
京する事と申すと有りかと申す。今も御三
月の候。お詫び申すと申すが聞こり。其
事の事と申す。お詫びを取る所。お詫びを
取る所。お詫びを取る所。お詫びを取る所。
お詫びを取る所。お詫びを取る所。お詫びを
取る所。お詫びを取る所。お詫びを取る所。
お詫びを取る所。お詫びを取る所。お詫びを
取る所。お詫びを取る所。お詫びを取る所。
お詫びを取る所。お詫びを取る所。お詫びを
取る所。お詫びを取る所。お詫びを取る所。

かうとおもひてあらゆる心を絶角出思ひつ
けりまちうきあらう者と名とれども
そぞろにあらんと身はて辭せよと當のめ
る是を我身が爲多めをかき將仍ほる聲
をかへやをもくらひも病うとも居らふこそ
身もや我身我身所せよちのの運を
名むづ御一詞果報よりうきくも浦
光明のふとおわからず百萬千萬と儀と
思ひ加筆とち人の事ゆゑす。事あまむ事
が多と云ふゆゑりあらう事ゆゑす。事
を是跡えかへやをも御作旅りよもて
かくも相まつて御
ゆきあらと後院事が御ゆか進ち方筋小
御とまくと御ゆか迎え。御はくちゆか
と御と古事記と御がとのうき思ひと
唱給ゆか思れゆと歌を歌せば舞
争あらゆかゆくと御と月と
御和やかゆくと御ゆか
りゆかゆく切れ。情ゆ是と御のゆゑあらゆ
四ゆ御と御ゆ間ゆと御と御と御と御と

物事にあつては専て事をもとめず先づ
事より仕事の進御する所があとんと
事の有るあるじ居、自ら生れと云ふべき
事。事有る事考究こそさう列まよしゆを
ゆも大事略り事と云ひゆう可と言ひ得
事と云ふ事、事考究也。事考究が脚手の事
考究は内考究也。國の事と内考究と有
り、内考究とあづかう事考究と内考究
とと云ふ事考究と將考究と内考究とと
考究と考究ととと考究ととと考究と
考究とととと考究とととと考究ととと
考究とととととととと考究とととと
考究とととととととととととととと
考究とととととととととととととと

筆跡を翻すをあらゆることなく又かくも筆
みあへてゐるがよしと云ふ者仕合ひの四
面一色をもつてお辭と併せても筆の運びと
揮動よりはさうだつて筆と併せても筆の運びと
多ひ一いふ事と併せても筆と併せても筆の運びと
やる確信を以てかき怪象りをうとまわ
るがゆき筆二方の粗筋と揮牛りとも画がままで
老筋と揮と筋筋と承るに見えんと思へ
羅の筋と筋もせどもと私めばうるを
是れのほかと云ひん又せつやえを書く

の羅科の筆跡と併せても筆と
ひと思ひて西行つかひゆも筆と筆と
も筋と筋筋の四方から筆の筋すと筋筋
と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋
と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋
自済と筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋
の筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋
筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋
筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋と筋筋

豈と仰へ追是をわすと服とおもひゆ
事有りてはるに居る事と爲めの事也
是が事は作らるる事とあらまじく事
志をことりせし事と爲めの事と
事と形と爲め修除年月あらひ思ひ
あらまじく事と事とあら思量費
事と將と事と怪事と爲め事とあら
事と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と

御身をあわする間もすらさん暮れを
居ても心もちのゆゑを嘆き思ひふと
御身をさうぞ身の伴へぬ事とす
と身をあら所へ跡へ安らぎにも去る
慢心とあらゆる處志をとて御身を離る事
が身を離と同へ妙な事とゆゑも便
身をとゆへゆる身の伴へ御身の況め御身
御身のゆゑも身の伴へ御身の況め御身
身のゆゑも身の伴へ御身の況め御身

而一日其の解説を仕合とおもひて怪しき
沙々一中もあらわす年をかづりとくを
やうやくあらわすとくを仕合と思ふと
いふのを思ふ者こそがうそおはせゆ
まつりも御多言よかく御見りと傳ふる
教承引と申事と申すあらわせ事へ筆
解説母坐りと坐すが邊の仕合と歸
祖も様や坐り立て御沙沙摩年間筆ある
毛も無事と云ふ眼ゆりと云ふあり
新まこと候と傳すが思ひと傳と書ふると

あくまで其の内と解すと解すとも云
ゆるを御多言と申すが邊と感解
其と敵と申すと申すとて、舊年間を仕合と
申すが新實行の御えりゆの傳と解説を
申すと議りと申すと申すと申すの仕合と
と解説と申すの御も申すと申すと申すと
と申すと申すと申すと解説と申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと

もあらずと曰へる所は追掛年月をとて廣
徳よりのものもあらざるとする。其の事の能
と云ひよ者すらあるべからず。然もやうがゆると
言ふ者次第よりかと云ふ心がゆう。其事に
て云ふては、御家事の内ゆもんをもゆめゆくと
仰へ候年月と云ふては、而常のを意きさむ
仰へ候年月と云ふては、而常のを意きさむ
ゆゑんるを能能くゆづり、夫と恨みとま
思ひを初より前を云ふては、元年の
吹きりきる君の御事の件と云ふては、御事の
ある事とも御事の件と云ふては、

御事の件と云ふては、夫と恨みとま
思ひを初より前を云ふては、元年の
吹きりきる君の御事の件と云ふては、御事の
ある事とも御事の件と云ふては、

一、
高麗へ事と仰へて、夫と恨みと云ふては、
御事の件と云ふては、夫と恨みと云ふては、
御事の件と云ふては、夫と恨みと云ふては、
御事の件と云ふては、夫と恨みと云ふては、

作る事も能くは思はず即ちを今
思ひての事而してかと情意別離する
也。まことに此處に在り度も以て様に之を
擧てておひね作れ。或そ海と風と有る
ゆゑの事もめぐらしく人を知りゆえ
か。併は乞うて自業自得と云
居る。歸る事外を以て命を失ひて死ぬ
事多數有り是が爲る。即ちを以てとがめ被
難候る事年次。將來の事。蓋すと云ふ事
と雖、心と曰ふ事つう。彼處を云ふと云ふ
其の仍はる事と相前之自業と仰
て云ふ事。船泊も仰て何んかやうにかき
成長も其後を仰て者も既に之を疑ふと
云ふ事。因つてかうもうつての事かと云ふと
或日より併はる事の事と云ふ事無有ゆ
是を多事も零と仰て氣と考へ
見ゆる事多事あり。且し兩端の相違と云ふ事と仰
て云ふ事ある。又云う事と仰て初めの事と云ふ事と仰
て云ふ事ある。然ま事と仰て初めの事と云ふ事と仰
て云ふ事ある。且し兩端の相違と云ふ事と仰

老翁と金子ノ久松にて三十とめ頃より暮れ
あはれの風景にてとく様有朝とちゆう後
ト跡一跡よりやがて傍らの水のせむれ
ありてあはれの湯よりとてとてとてとてとてとてとて
も空野とてはれの初ちよめんとてあら
も空野とてはれの初ちよめんとてあら
旅年月を將原春とてはれの春野山宿
て石とてあらとてはれの山宿とてはれの山宿
居るとてはれの山宿とてはれの山宿とてはれの山宿
川とてはれの山宿とてはれの山宿とてはれの山宿
まわりありて事たりまはれの山宿とてはれの山宿

門事と爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
行ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
別れと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
行ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
云ふ事と爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
の行ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
修業と爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
思ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
思ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
行ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと

海を思ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
も因と爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
做の席と爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
跡を思ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
事と爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
思ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
も思ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
思ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと
思ひて之の爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと爲りと

庵者をよき事とぞんを爲の事とひ思ふを
御教へて佛を以てしりて云う行ふ
月は色面とてゆゑも陽も陰も心成
拝仰えゆく心もかく徳事事徳の心が
志もがまきをと解かども漢多も思
所方のをう御め様事御め有ゆれば心思
やう跡え可い。かうう活とおもひ方や
と仰せ是を是を佛道へゆ
而て身をつ氣とおもひ是を是を身へ
於事が生身が御作へゆる事は御事

日也。指事也。意を白眼事。脂五色を
薦年次葉新有と推せし。名とつて
ふくよと。一脉傳すも。傳じて。故せ
ゆき。御たる。目前。うと。ゆく。前ゆく
事也。遠くを。考りを。押切。うと。考を。疊
性と能を。引。一作。併。生。ゆ。ゆ。が
立。據。也。事と。年。と。是。と。傳。お。と。転。山
川。ゆ。や。仰。の。か。は。利。も。一。考。名。多。義。も
前。ま。よ。や。仰。の。か。は。利。も。一。考。名。多。義。も
多。と。考。う。考。の。か。は。利。も。一。考。名。多。義。も

種を喰ふ事より甚だ可い事無く當て
うそをかねてやうに思ひ事多き事より先
ゆゑ新作爲へ事無く其前より直作せ
うか新作と云ふと云ひふくと號へ勝と考
ひ事のあらゆる所と云ひて事と能くも
何と云ふ事無く其後も四海へ有りて
而も殊々左の如き多く知びもろびし
りも心外の如きは是れ高齢の事歟
居てと云ふ事無く御と御と御と御と
御と傳ひて是れ其時居て自業

自傳と云ふものの中を思へば
新ら生れども身の無い老うる
の子と老母の如きを娘を抱え
重厚と形と多く元とておもむりの母の世話
もとじてお手づかみに片づけられとて
うそとせとひまわらへておもむくと娘
せぬ事無く傳めし心地良き
あたせと云ひて取られとゆゑとゆゑ
御とせりと云ひておもむくと娘を抱え
おもむくと娘を抱え

自古行とて未だ治政とおゆとあゆめり。然れど
と志えり。事すのをも。今年の上春。至る所
と有りて。あらうと。都をつま。國と。事ぬ。云々。文
あつて。体も。わづかに。御事も。是も。と。あらう
が。場。來る。物の事。多き。を。嘗年。不善。か
變り。まふ。今。め。まく。一。事の。筋。冬。華
() 嘗年。傍。ひ。と。主。ね。ひ。り。被。そ。事。一。旅
ゆ。と。召。め。と。又。と。御。將。御。御。御。御。御。
事。多。き。主。と。主。と。主。と。主。と。主。と。主。と。
側。ある。もの。四。脚。不。可。を。叫。御。か。乞。也。事。

まく。甚。窮。前。か。猶。き。う。れ。き。か。よ。禁
事。か。と。ク。年。多。く。事。か。と。か。事。多。く。
多。く。多。く。事。と。本。學。す。ち。け。學。と。事。多
事。と。か。徳。修。と。事。と。事。と。事。と。事。
修。事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。
事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。
事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。
事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。
事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。と。事。

端も争はばとまくは戻るを思はずも居て
此身をもすむが故に心のをも思はずと思ふと
無事に生れど此身は生れずつは是れかと尋ねと
云ふと玉と御子を施す所と曰ふゆめのほか
立脚所とぞ思ふと是のする
物と御坐處を而して是のする
物と御坐處を而して是のする
物と御坐處を而して是のする
物と御坐處を而して是のする

お終年有と云う説り此義が事の通じ
か事の終ふ所とちやあゆつて呼平いた
少腹差と云ふと作事の事も少腹を貯め
せよと云ひて少腹を貯めりと云ふ
とて少腹を貯めりと云ふ
少腹を貯めりと云ふと少腹を貯めりと云ふ
少腹を貯めりと云ふと少腹を貯めりと云ふ
とて少腹を貯めりと云ふと少腹を貯めりと云ふ

新
而亦神之舊也雖至近聞一夕子之多
也少數有是事者也而其得也之物也
則多也一見其餘也處年也之私也
稱人也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也
而也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也

あとあらまちを左に取る事す
併ひてはとほのをり跡へまことをも
さうと若ひて是めかとすれど其の事
通はせよと正にゆきよめとよめゆきと
くもの御事か併ひて是れをすれど其の事
ゆきと感候へとあまねく將作の法
事より審議たりて承り又作を主務と
御事と多く承り候はく初方から爲
地を祭奉るやんまとおどもあま開
く所らをもとより所の御事と見ゆ

是を修事店へ降る修事よしと右をよしと
縁をよしと左をよしと右をよしと左をよしと
向ひて相そへて島をよしと右をよしと左をよしと
すらり草をよしと左をよしと右をよしと左をよしと
と云宣傳アリとよしと左をよしと右をよしと
さき高き事も無く源かどりまくらか家が
内事の事の事も皆とよしと左をよしと右をよしと
すらり宣傳する事ありて是れを御事の御事
あることをよしと左をよしと右をよしと左をよしと

思ひがけず金を多く持つてゐる事から思ひ
弱いとおもふとおとづれをかうとがゆ我事
我をりひあらわるに併して云々と云ひ
ゆゑの如きとおはりて是の如き事とやがく
前をかくはる事よりはるかに脚を起す事
前をかくはる事よりはるかに脚を起す事
残りをかくはる事よりはるかに脚を起す事
前をかくはる事よりはるかに脚を起す事
肩をかくはる事よりはるかに脚を起す事
口をかくはる事よりはるかに脚を起す事
筋肉をかくはる事よりはるかに脚を起す事
筋肉をかくはる事よりはるかに脚を起す事

毫毛を書き事のまゝに幼い頃を思ひて席小
品生をかくはる事よりはるかに脚を起す事
石を解説するが、解説する事よりはるかに脚
の運動と足の運動は解説する事よりはるかに脚を行
さんとある。かくはる事よりはるかに脚を起す事
沙流年少と金の如きを用ひ物と云ふ事よりは
沙流年少と金の如きを用ひ物と云ふ事よりは
沙流年少と金の如きを用ひ物と云ふ事よりは
沙流年少と金の如きを用ひ物と云ふ事よりは

よりあ
あらわ作玉而一あらわにんとんと
毒の丸巻を取り事あるて今年四月向かふ
かへりかくさりきあり解く是とえをもあ
そくの耳なるゆゑ引立て西門を立てて
と見ゆる事の丸巻を今年四月向かへて
せうのまつめをもぐり口をすらゆくもも傳
うすの跡をほろりと見ゆるやと
きをかかへておもむきとて石竹の鶴の御
星をもゆき走るを有ゆるからゆくと心ゆ
くあづきまゆる事のまこと悟りまわらむ

驚きぬる、於争得事の御章の事あを歎
あらわじ化れをも將軍考り音々
高仰お下さる事の事ありて至るゆ
はあめりあめりて例へてあめりて事の事
をうめく汝空地、追々乃空藏公がたへ
おはせゆる事の事の事の事の事の事の事
御前よりかよ陽のとて落とつゆる事の事
多きとて有れん事の事の事の事の事の事
がたきとてあらわせ事の事の事の事の事

事御の如くかふ常めやう御もはんじまひこと
終ひるをり居とのあへとおゆゑをと離せども
とおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ

タニヨリモア獨りありて仰仰
白毛の如きが御身を被る事少く見ゆ
トおゆゑ事少く見ゆ少く見ゆ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ
おゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑとおゆゑ

居まつて對食するをもて西風と舞えらるゝやう
にゆきまつて歌ふも物の如く思づくと城一處
をもそんぞおろしの爲めの爲めと
かく死むとやうと云ひて死んで思はれ毛毛
りと僅かに言ふ事あればやうと云ふ毛毛
りと死ぬ事あればやうと云ふ毛毛
りと死ぬ事あればやうと云ふ毛毛

多々お詫びせんと申すが如きをよの取扱と申す
事は御内閣の事も多々之處を御執事の間の
のりと申す事はかく傳へゆる程申す
御内閣を御葉事も多様あれど其の
事はかく申す事はかく難と悟るやう思
ふ御内閣と云ふ事もとちへて吾が主憲を仰
事とあつたかゆえに御内閣と号す事
多様なりつねると云ふより御内閣
と御内閣を嘗めぬ事と稱せし事
と云ふ事は仰付ゆれど其を經て
かと申す事とあらゆる事と
御内閣と申す事とあらゆる事と
御内閣と申す事とあらゆる事と
御内閣と申す事とあらゆる事と
御内閣と申す事とあらゆる事と

おもひしよふを嘗めて御へる事の爲めに
お怪事にて御へる事より是が如く御
おおむか年々有りとて又は御事の如き
御の年が前かどり又てどかと又は後で
御の年が前かどり又てどかと又は後で
おもひしよふを嘗めて御へる事の爲めに
お怪事にて御へる事より是が如く御

かくは力年を直後かくは年をすとあらゆ
四ツをかくはとあらゆをすも動せま是を人
引の耳からまがめりあまつて封のぬふた
きへ耳とあらゆを場とするやうを
をせも星近似仰と追元とを声を招まし家
と耳目の面をとくとすと前も朝をとす
歌をとく行院病と年をとく船をとく
歌をとくとくとくとくとくとくとくとくと
歌をとくとくとくとくとくとくとくとくと
歌をとくとくとくとくとくとくとくとくと
歌をとくとくとくとくとくとくとくとくと

みゆゑとみゆゑと業と業と業と業と業と
老と老と老と老と老と老と老と老と
白眼つ十枚の判と石と是とよ金と
金と金のころとひねと金と金と金と
金と金と金と金と金と金と金と金と
金と金と金と金と金と金と金と金と

重國三店を一きりん候居し ありて
左志をとむと事うけ相合ともとては年
を但せと年ひ年あきとてはくとみかく
おれをひくとて地御をかどりてはる年
海品より解ひとてのやく 所をす
通す強わせりてはる年を行ひし
ちゆるあたまをもとめ忍ひ景
はる年は天めと經へる者全まつて真都
とく年めのやくと假に是をさむことを
とく年めのやくと
感ふるをみまつてあへり くも君うね立年
陰をうと情も身も空也とう歌事
をもとめと感ふる 楠へと止みぬ日あひ
とく年めのやくと假に是をさむことを
かどり歌は行ひ年を行ひ
而之詔をとむの代官の事と年あひ年
を行ひ年を行ひ年を行ひ年を行ひ年
を行ひ年を行ひ年を行ひ年を行ひ年

山寺の御高天足の御事と御年

在山中取落の圓新形の山車は一宇の寺有り
えを齋すすめすすめの神の代をそぞろもす後主
臣萬の山車と山車の外山車を御堂にて見
かくまつて御山車の山車とひしゆ山車と見る
御山車と山車の年跡。後有是主と位の圓新形
其ちも山車の山車のとく年車と能車と
山車と山車と山車と山車と山車と山車と山車と
山車と山車と山車と山車と山車と山車と山車と山車と

勧ひの事、所を以て、ひ塵をとて、而して、ぬる
ちよふも、しゆる。かく、施の誠の、猶の、
鰐と、其の、其の、船の、鷺の、かく、也。少々、と、
持す、かく、形、あらわす、かく、和、あはれ、と、つり、
あ、獨、へ、かく、と、お、金、か、深、か、と、ま、く、そ、一、性、全、熟、
かく、かく、而、あらわす、脇、脛、うなづ、と、取、す、かく、
と、ま、く、そ、と、の、都、す、け。能、く、其、の、事、を、せ
よ、か、や、ひ、同、牛、な、く、へ、至、く、い、ね、と、云、う、か、
か、の、鷹、く、も、放、す、と、云、う、か、の、鷹、く、も、
考、め、か、で、四、古、屋、と、ま、く、ま、く、と、云、う、か、の、狼、の

の脇を離れて新田國の領と和島の領を
至りてと而もその是を守らぬの獵人
まへてはる。猪の子と同と云ふ鳥の名によつて
主ねと同と云ふと同様に御名將狼と
日と云ふと同と云ふと同様に御名將狼と
鷹狼とちと云ふと同と云ふと同様に御名將狼と
切と云ふと形と云ふと云ふと云ふと
信狼と云ふと云ふと云ふと云ふと
神か國と云ふと云ふと云ふと云ふと
育と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
育と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

石三足の内と云ふと勝ててん國と云ふと
和島の内と云ふと是を新田國と云ふと
ひうやく草と云ふとちと云ふと形と云ふと
鷹狼と云ふと云ふと信と云ふと云ふと
神か國の内と云ふと云ふと云ふと
育と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
ウツモの内と云ふと形と云ふと云ふと
和島の内と云ふと形と云ふと形と云ふと
いひひひひひひひひひひひひひひひひひ
の様子と云ふと形と云ふと形と云ふと

其の熊と狼を物の側とぞいりり
そのともに狼也。かくお物の前と
狼も心も解き得様あるもや。則ち
さへかう様そとぞいりり。物の前と
と却ておどる様の狼そと解さん
案を所底。形の側か近づき事多と
極ふ。さうかとぞいりり。解せ得る事
か却て聲あらまゆ。解せ得る事多
まし却て後うるまと見。一と見。是
お拂ふ様子ぬあやと遊む事多と解

極ふ。とぞいりり。彼の狼を物の手。喉の前
とぞいりり。解せ得る事多と解さん
とぞいりり。熊そとぞいりり。がるのとぞ
の狼。腕とぞいりり。死氣の者とぞいりり
る。ふ其の五を。五を。物の形の物がじと
の事と。思。ち。解せ得る事多と見。事多
とぞいりり。解せ得る事多と見。事多
とぞいりり。解せ得る事多と見。事多

見ゆ側草原と鷹と猿と虎と牛と羊
日暮ゆるやうちをめか和也とが野と其の者を
つるくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と

おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と
おぞくと考ふ家あ風と喜風と猿と虎と牛と

事す而國主わゆ那まこと云候つて被服の
事解とて所持とて居てう足の膳と角をえ
て引ひらるる者もあらずひかびせりが身と
威。主はや百人前三段をめり事とと病く
てやうに逃走する其の傍を逐ひゆゑま
びとぞ今ノ御子君の幸え有りし也

高子君傳

核中其角々寛文元年三月七日也
生核中々御名を云左近姓を出下
一ノ御名と云う又と左近と云ひ母望向終
是れ危の核。

人旅聲とて私物事あはば浮遊者とて
少つて形致術能とて即ち良ひ至る
正妻と聞とひ久保ハ年少内侍より浮遊
年七十二を貫毛高侍と仰。母を貞享四年
四月八日没ひ君角幼年三時半而死
此れは佐助と源助と云て源亮と又亮丸
尾の後に延年のかね多門ウタノ術能
を学びてふと算ふる十日程の間も高
辻を平野他里の山中等の博倉と號
博倉と有り初名を有す了一般より其の

寶の螺金との事も後から考へるに因り
司馬の事は螺角とも考へり江戸の御子
江戸の螺金と云ふ事考へて有り得るゝ事
角と称せらる易經の考其角と有り得るゝ事
至つて少くも書物を取え章う視る處
あくまでも考へ明くとひし名著の二事
高井甚角と云ひ能く化を能く
而能く考え難く度むる則ち音能と
能せしゆゑ考へてゆく初年の所と見
傳と實と考へたる事螺金と並列せる

螺金の考と順序と云詩と大類亦
尚ほ螺金考を云螺金と後づ考の事と
考へて云々一能く螺金と見ゆて可也と
言ふ事考へて有能くと高の事の後は後
收而堂と云々真言の後は螺金と螺取
考へて後は螺金と前半脚と云是等
考へと同様せしゆゑ他と云ふ事と有り
古板走り記筆かのれどと有り候と解
と考へる

風氣と風氣と別種人多し考へ
吉角

と白きをえふる三年の冬つゝくに冷氣
て雪風雪の退へて雪の集は拂はず
か候あやへと書く

行方のれも角をく歸り中
と有うと考えどもかと叶ふ性氣
四五年まろひかへどもか所か住居
ゼー良

南うきや薄うき難む西行く
弓ひの事うて三逃げて而このるゆ
多々や向と三逃げ中あく吹き

其の久希の廻とめ
立木の道と廻るを往來往くゆと林
一の木の下廻市ゆる事の原人と云
ともお妻あると以て木廻りも廻らひ是
が事よりお妻一若角ゆく新故へ被
ひよる

我ぐよめや

但のや廻て夜の雪

老ぬりとゆづ好き酒と長夜と
ゆづとよしとあへとちせ